

2021年6月27日 礼拝説教要旨

詩編講解説教66「試みのときも」

詩編66：10～20、Iペトロ1：6～9

イスラエルの人々にとって出エジプトの過越の話、海を分けた話、荒野でマナを食べさせた話、ヨルダン川を渡って約束の地に入った話などは子どもたちに繰り返し語り聞かせなければならぬ必須の故事でありました。どうしてこのような話を繰り返し伝えたのかというと、それによって神さまの救いの御業が単に昔話、過去の出来事ではなく、今を生きる力になる。人生に振りかかってくる様々な試練や課題を乗り越えていく力になるからです。

人間はそういう物語を必要としています。わたしたちも小説を読んだり、映画を観たりいたします。そのストーリーと自分自身を重ね合わせる。それが生きる力になるという経験があります。そう考えますと、聖書は最大の人生の物語、救いのドラマです。それは他でもない、わたしの救いの物語だからです。「神を畏れる人は皆、聞くがよい。わたしに成し遂げてくださったことを物語ろう」（16節）とあります。わたしたちは教会でこの神さまがわたしのために成し遂げてくださったことを聞きます。それがわたしたちの生きる力になるのです。

「神よ、あなたは我らを試みられた。銀を火で練るように我らを試された。あなたは我らを網に追い込み、我らの腰に枷をはめ、人が我らを駆り立てることを許された。我らは火の中、水の中を通ったが、あなたは我らを導き出して豊かな所に置かれた」（10～12節）このところを読むと、まるで神さまがわたしたちを試みているように読むこともできます。神さまが苦しめ、災いを下された。しかしそれは誤解です。そうではなく、その試みもまた神さまのご支配の中にあるということです。ご支配にあるというのは、神さまが試みているということではなく、その試みを神さまはご存知であられ、かつそれを支配し、そこから救い出される力をお持ちであられるということです。例えば、あのヨブを試みたのはサタンであって、神さまではありません。神さまはその悪魔の試みをご存知でしたが、最後はその試みからヨブを救い出されました。「あなたは我らを導き出して、豊かな所に置かれた」（12節）そこに御心がある。試みが御心なのではありません。

人生に起こる試練を神さまはご存知であられます。どうしてそのようなことが言えるのか。それはこの試みを神さまご自身が経験され、これをくぐり抜けてくださったからです。火の中、水の中を通り、豊かなところに導かれる。その救いを神さまご自身が経験され、成し遂げてくださいました。それがイエス・キリストの出来事です。試みと聞いてすぐ頭に思い浮かべる話があります。福音書が伝える悪魔の誘惑の話です。主イエスが荒野で40日間悪魔から試みをお受けになられる。しかしこれをことごとく退けられ、誘惑に勝利された。それはわたしたちの人生に起こる試み、誘惑を主が担われ、これに打ち勝ってくださったことに他なりません。

また試みはそれだけではありません。主イエスの地上でのご生涯は試みの連続でありましたが最後は十字架で死なれます。ここに最大の試みがあります。人々から軽蔑され、侮辱される。12節「人が我らを駆り立てることを許された」とあります。直訳では「我らの頭に人を置く」人に踏みじられる屈辱的な経験です。そして十字架の上で「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれます。神さまから見捨てられるという試み。これ以上ない試みの極みを経験された。けれどもこの試みをくぐり抜け、キリストは三日目によみがえら

れました。火の中、水の中を通り、神さまの御前に、永遠の命という豊かな所に入られた。この試みに打ち勝たれたキリストに結ばれて、わたしたちは人生に起こる試練を乗り越えることができるのです。それは試みに支配されるのではなく、試みを支配され、これに勝利された神さまによって、その先に用意されている豊かなところを見させていただくことです。なぜ教会が繰り返しキリストの十字架とよみがえりを物語るのか。それはたとえ試みの連続であっても、キリストが十字架とよみがえりの御業によって、この試みをくぐり抜け、豊かなところに導かれる。この事実がわたしたちの力となり、救い、希望になるからです。

今から約100年前にスペイン風邪の世界的大流行がありました。このパンデミックは1918年から3年ほど続き、第三波まで繰り返し、全世界で数千万人、おおよそ二千~五千万人の死者が出たと言われています。ちなみにコロナでは現在まで世界でおおよそ四百万人が亡くなっています。日本でも1918年から1921年（大正10年）までに3回の大流行があり、国内でおおよそ45万人が亡くなりました。現在のコロナでは日本の死者は昨日（2021年6月26日）の時点で14,665人ということですから、桁違いに大きいものだったことがわかります。もちろん医学的にも現代のような水準ではなかったし、衛生環境の違いや人々の知識も情報量も圧倒的に少ないということも影響していると思われます。

当時、わたしたちの教会は白井慶吉牧師の時代です。50年史を見ると1918年のところは「牧師のご家庭に死去病気等の故障が多かった」と記されています。また1921年1月に長老の大島虎毅が「流感にて死去」とあります。「五〇才を多く出ず教会にとって大損失なり」と書いてあります。これはひょっとするとスペイン風邪だったのかもしれませんが。大島は軍人でしたが信徒伝道者としても活躍されました。大島は亡くなる前の年に1920年に牧師招聘のために朝鮮に行っています。また全国を伝道のために飛び回っていたようですからそれだけ感染のリスクもあったでしょう。でも当時の教会はあまり気にしないで淡々と福音宣教の御業に仕えているような印象を受けます。何かわたしたちの方が過剰に反応しているのかもしれませんが。

どの時代も試みはあります。大切なのはその試みに支配されないこと。それよりもその試みをも支配され、これに打ち勝たれる神さまの御業を宣べ伝えること。教会はそこを重んじてきたのではないのでしょうか。大島長老がパンデミックの中、牧師招聘のために遠く大陸まで渡り、新しい牧師を連れてくるというのは、そういうことなのかもしれません。御言葉を聞くことの方がもっと重要なことなのです。中世のペストの流行の時代も多くの聖職者が罹患して死にました。それはこのコロナでも同じです。訪問して御言葉を語り、多くの患者を看取り、葬儀をして、牧師、司祭自ら感染していくのです。それは命を粗末にしているということではありません。その命が本来必要としているものを見ている。イギリスの作家ドロシー・セイヤーズの言葉を借りて言えば、「世界を創造なさった神が世界のうちにかつて生き、墓と死の門をくぐり抜けたれたという心の震えるような確信」それを伝えることがどんな試みにも優って重要であるということをわたしたちは知っているのです。試みに支配されない生き方がそこにあります。